

# 進化思想とヴェブレンの経済学構想

—近年の諸研究に関するサーベイ—

石田 教子

## 1. はじめに

本稿の目的は、ヴェブレン (Thorstein Veblen, 1857-1929) の経済学構想と進化思想の関係をめぐる諸研究をサーベイすることにある。したがって、本稿は、それらの諸研究に対して何らかの新たな解釈を積極的に提示するというよりは、そこで問題とされてきた諸論点を浮き彫りにすることを目指す。もっとも先行研究は膨大であり、そのすべてを網羅することは適わないが、特に近年のいくつかの論争を取り上げることによって、ヴェブレンの経済学構想の意義をより正確に理解するための方向性を示唆したい。

周知のように、ダーウィン (Charles Darwin, 1809-82) の進化論は、19世紀後半の社会科学に対してはかりしえない影響を与えた。ヴェブレンに関していえば、当時の正統派経済学の批判を試みながら、進化論的経済学という枠組みを提唱した事実からも明らかなおり、進化論が彼の思想形成に大いに関わっていたことを否定する研究者はいない。例えば、Hodgson (2001b, p. 385) は、ダーウィニズムが「理論的教義であるとともに哲学的教義」でもあったという思想史的認識を明らかにした上で、ヴェブレンを「哲学的レベルでのダーウィニズムの経済学に対するインプリケーションを理解した最初の経済学者」と位置づけている<sup>1)</sup>。

しかし、進化論がヴェブレンの経済学に影響を与えたということを指摘するだけなら易しい。だ

が、それがどのような意味において彼の思想形成に関わり、そして活かされていったのかという点に及ぶなら、その理解は容易ではない。進化論の意義はさまざまに解釈されただけでなく、その影響もさまざまな領域に及んだからである。進化論は、生物史と人類史のアナロジカルな認識を与えただけではない。それは、方法論的議論——存在論、認識論および知識論——や、学問領域の範囲の問題——理論と実践の関係および科学と道徳の関係——に対しても絶大な知的インパクトをもたらしたのである。

本稿は、そのような科学史的示唆を受け、先行する諸研究の論点の整理を試みるが、全体の構成は次のようになっている。次の第2節では、このテーマが少なからず論争を生じさせてきた一因が、生物学史と経済学史の相互作用に関わっていたことを示す。過去の一点の思想関係の考察は、決して一度で終わるわけではない。生物学史の研究が進行すれば、それに合わせて当時の思想関係の解釈は修正ないし再考を余儀なくされ、経済学史研究も、時代を超えて新たな解釈の可能性を得ることとなるからである。また、進化論と経済学の関係は、ダーウィニズムのエッセンス——例えば、歴史、変異、選択、遺伝——を何に見出すかによっても、さまざまに解釈される可能性を秘めている。ここでは、本稿の議論の出発点として、20世紀後半以降のダーウィンとダーウィニズムに関わる修正主義的研究の進展がヴェブレン解釈に及ぼした影響を考察する。つづく二つの節で

は、進化思想と因果論の関係をめぐる諸研究を紹介する。第3節では、進化論をモデルとするヴェブレンの経済社会分析がどのように解釈されるべきかという問題に光を当てる。これは、ヴェブレンの正統派経済学批判とも切り離しえない論点であり、彼の経済理論における人間や諸制度の分析の位置づけが問われることとなる。第4節では、進化論をモデルとするヴェブレンの経済学方法論が彼の思想的立場をどのように照らし出すかという問題を扱う。これは、彼が既存の社会制度に対して規範的な価値判断を下したのか否か、あるいは、彼が倫理的相対主義者であったのか否かという問題とも関わっている。

## 2. ダーウィンとダーウィニズム ——進化概念の解釈可能性——

ダーウィンの進化論が19世紀後半以降の諸思想に与えたインパクトについてはすでに述べた。そして、その影響について、誰もが真っ先に思い浮かべるのは、自然神学に対するダメージであろう。進化論は、神のデザインではなく、自然の法則によって進化が起こるということを示唆したからである。

だが、その思想動向はそれほど単純ではなかった。その当時、進化論は、一般に言われるように自然神学を拒絶する必要はなかったし、神学者もまた、進化論を否定する必要はなかったからである。宗教の擁護に躍起になったとされるヴェブレンの師ポーターでさえ、ダーウィンが「最も重要な科学的発見の一つを成し遂げたこと」を否定することはなかったし、彼にとって「進化という漠然とした伸縮自在な呼称」(Porter, 1888, p. 205)は、有神論とすら両立しうるものであった。だからこそ、ヴェブレンは、神の存在を否定したことにはなく、ダーウィンがその問題を未決問題として切り離したことに科学性を見出し、ポーターも、ダーウィンの進化論の科学性を認めた上で、知識に関わる彼の立場を批判しえたのである<sup>2)</sup>。

また、しばしばダーウィンの影響は、18世紀

の人文社会科学に多大な影響を与えたニュートン物理学のそれに準えられるが、前者の影響はいっそう密接であるばかりか複雑である。というのは、前者には、自然科学から社会科学への一方的な影響関係というよりは、むしろ両者の相互的な影響関係が存在していたからである。したがって、ダーウィンの進化論をモデルにして経済学が再建されるという19世紀末のヴェブレンのシナリオは、進化論のインパクトが彼にとっていかに強烈であったかを説明するとはいえ、20世紀中葉以降に提示された生物学史解釈、特に『『起源』の起源』(the origin of "The Origin")と呼ばれる一連の諸研究の成果からすれば、いささか素朴すぎると思われるかもしれない。今日では、進化の概念は、生物学から経済学にもたらされたというよりは、少なくとも経済学が生物学に受け渡し、その後生物学から経済学へ逆輸入されたという歴史が一般に認識されているからである。

西部(2000, p. 70)によれば、「歴史的に見れば、進化の考え方は、市場経済における競争や分業を考察したスコットランド啓蒙思想家マンデヴィル、ヒューム、スミスや人口論を提示したマルサスによって異なる概念として生み出された。ダーウィンはそれらの影響のもとで進化論を形成したのである。その後、社会科学ではダーウィンの影響を受け、スペンサー流の進化概念が流行した。19世紀のマルクス、マーシャル、メンガー、20世紀のヴェブレン、シュンペーター、ハイエクは、こうした進化論の影響を受けながら、自己の理論において独自の『経済的進化』の概念を展開してきた。」こうした思想史的理解を前提とすれば、進化論それ自体が有する科学方法論的意義を厳密に検討しようとするHodgson(2001b, pp. 385-86)が、「『進化』という語は、必ずしも生物学全般を意味するわけではないし、特にダーウィンを意味するわけでもない」のだから、「ある理論を『進化論的』と記述する場合に、社会学者が生物学的進化との関係を論証する必要はない」と述べたのも驚くべきことではない。

したがって、ヴェブレンに対するダーウィンの影響がきわめて濃厚であることに疑いはないが、この点ばかりを無批判に強調する見解には疑問の声が上がった。なかでも、特に論争を巻き起こしたのは、ヴェブレンとエアーズ（Clarence Edwin Ayres, 1890-72）のダーウィン解釈に対して、ジョーンズが提起した問題である。もっともそれは、ヴェブレンの科学的観点についての検討というよりは、むしろダーウィンそのものの解釈を論拠としていた。ヴェブレンは、科学、すなわち進化論的科学的のあるべき要素の一つとして非目的論を据えたけれども、そもそもダーウィン自身の理論は非目的論的であったのか。あるいは、ヴェブレンが主張するように、確かに古典派経済学は前ダーウィンのものであるかもしれないが、古典派経済学は、そのダーウィンが採用したアイデアの一部ではなかったか、と。

Jones (1986, p. 1049) によれば、「スコットランド常識哲学に通底する本質的なテーマは、社会分析の観点から見て、個人の活動の総計が、社会が基礎をおく諸制度を生み出すというもの」であり、ダーウィンはこの見解を取り入れた。そして、彼が「種のレベルの生存が進化の記録であり、個体のレベルの生存がその推進力であることを理解していた」(Ibid., p. 1050) のは、マルサスのおかげであった<sup>3)</sup>。したがって、ジョーンズは、S. J. グールドの解釈に賛同を示す。——すなわち、ダーウィンは「自然選択理論を確証するために、自然にアダム・スミスを接ぎ木したのである」(Ibid., p. 1052)。

ジョーンズは、近年の生物学史の成果をもとにして、ダーウィンの理論が目的論的とも、非目的論的とも解釈される点に注目した。それによって、彼は、ヴェブレンらによるダーウィン進化論の解釈が「誤解」であるという結論を引き出すこととなった。

第一に、仮にダーウィンの理論が非目的論的であったなら、生物学史の新たな解釈が示すダーウィンと古典派経済学のリンクはどのように説明

されるべきか。第二に、仮にダーウィンの理論が目的論的であったなら、次の二つの問題が生じてくる。すなわち、そうであるとすれば、ヴェブレンらが解釈した進化の意味は、価値判断を含むし、ダーウィンがスミスから拾い上げたような穏やかな楽観主義と同等のものということにならないか。また、ダーウィンをモデルとする進化論的経済学は、なぜ今日においても古典派経済学に代わる選択肢を示すことができないのか。例えば、古典派の価格理論が前ダーウィンのであり、それゆえに不適切であるならば、なぜそれは文字どおり消滅したり、あるいは何かしらより重要な理論へと進化したりしなかったのか。なぜ一つの分析ツールとしての価格理論は存続しているのか。そのこと自体が、価格理論が自然選択によって選択されたということの意味することにならないか、と。

ヴェブレンがダーウィン主義者であり、彼がダーウィンに見出した意義が非目的論的变化であり、これが正鵠を射たダーウィン解釈であるというのは定説であっただけに、このジョーンズの議論は、ヴェブレン研究に大きな波紋を投じた。それによって、ダーウィンの進化論を支えているとヴェブレニアンが信じていた方法論的基礎が揺らいだかのように見えたと、ヴェブレンのダーウィン解釈にとどまらず、彼の進化論的経済学の妥当性自体に疑いが向けられたかのように受け取られたからである。

そして、このジョーンズの問題提起を契機にして、ヴェブレンの経済学構想と進化思想の関係を再考しようとする議論が活発に取り交わされるようになった。

Liebhfafsky (1988) によれば、ジョーンズは、ヴェブレンやエアーズに対するダーウィンの影響がダーウィンから直接的に得られただけではなく、カント (Immanuel Kant, 1724-1804) やパーズ (Charles Sanders Peirce, 1839-1914)、デューイ (John Dewey, 1859-1952) を経由していることを考慮していない。実際、ヴェブレンは、ジョーンズ・

ホプキンス大学時代にはパースと直接的な接点を持った可能性があり、イェール大学時代にはカントを研究し、シカゴ大学時代にはデューイと同僚であった。つまり、リーバフスキーの論点は、ヴェブレンらの進化論解釈はダーウィンの進化論との関連だけでは説明しきれないというところにある<sup>4)</sup>。リーバフスキーは、少なくともエアーズの経済学の源泉がデューイにあり、デューイ哲学の経験主義ないし道具主義の精神が彼のダーウィン解釈に組み込まれていることを強調することによって、このジョーンズの批判に応えた<sup>5)</sup>。

また、Tilman (1990) が主張するように、ダーウィンと古典派経済学とを容易く結びつけたジョーンズの主張には難もある。彼が着目したのは、生物学史と社会科学史における認識の時間的ギャップである。古典派経済学は確かにダーウィンの理論の形成に貢献したかもしれない。だが、そのことは、必ずしも古典派経済学がダーウィンの成果とされる論点を体現していたことを意味するわけではない。また、そもそもある知的成果が公にされたときに、その論点が直ちにその時代の思想家に正確に受容されるとは限らない。実際、進化を非目的論的变化と見なす——例えば、進歩と進化を概念的に区別する——ヴェブレンの解釈は当時においては珍しく、生物学史においてもそれが一般に認識されたのは1940年以降であったと言われている<sup>6)</sup>。

さらに、ティルマンが目を向けるのは、意識的であるかは別にしても、ヴェブレンがラマルクの獲得形質の遺伝の観念を活用している点である。実際、ヴェブレンの社会進化論は、自然選択の観念というよりは、隔世遺伝の観念によってよりよく理解されうる側面を持っている。そして、この点を敷衍すれば、ジョーンズの問い——なぜ古典派経済学は生き続けているのか——に対する回答が可能となる。隔世遺伝は退化や痕跡器官の存在を説明するが、その場合、選択された生存者は必ずしも最適者を意味するわけではない。そうだとすれば、古典派の枠組みが選択されたことも経済

学説の生存闘争における勝利を意味するわけではない。そして、Edgell and Tilman (1989, p. 1010) は次のように述べた。

ヴェブレンは本質的にダーウィン主義者であったが、彼の社会変化の進化論は、特別な個々の制度の発生に関する限りにおいては、ラマルクの制度的な術語でより容易に理解されるだろう。彼が新古典派経済学を前ダーウィンのものであるとして酷評したにもかかわらず、制度変化という彼独自の説明の重要な部分がダーウィンのではなく、ラマルク的であったことは実際には皮肉なことである。

ダーウィンスペンサー的「最適者生存」の概念は、退化や痕跡器官の残存に目を向けることによって、「最不適者生存」の概念にも変わりうる。より厳密には、そのことによって、そもそも最適か否かの区別そのものが無意味となる。

しかし、このティルマンの評価には疑問も残る。ダーウィン主義者であるヴェブレンがラマルクの側面を持ち合わせることは、なぜ「皮肉」であるのだろうか。そこには、ヴェブレンのダーウィン像は正確な解釈であるはずだという、ヴェブレニアンの暗黙の了解が少なからず存在しているように思われる。だが、ヴェブレン自身は、ダーウィンが目的論的であるかどうか未決の問題であることを了解していたし、決して生涯をつうじてダーウィンの科学性に確固たる信頼を抱きつづけていたわけではなかった<sup>7)</sup>。そもそも19世紀末から20世紀初頭は、ダーウィンの進化論に対する信頼が揺らいだ時期であったからである<sup>8)</sup>。そうだとすれば、今日においてダーウィンの意義と見なされているものを前提としたヴェブレン思想の再考は、少なからぬ手がかりを与えるとはいえ、その内容の理解を歪める危険性も、同時にはらんでいることができるだろう。

以上の論争は、ヴェブレニアンの論調が制度主義の擁護に傾斜するという、いささか感情的な様

相を帯びることとなった。だが、ジョーンズの指摘は、ダーウィンの進化論とその科学性、そしてヴェブレンの理論的成果を、ヴェブレニアンが素朴に同一視している点を明らかにしたという意味では、重要な示唆を与えるものと考えられる。それは、いくつかの異なる論点が混在していることを気づかせてくれるからである。

- ①ダーウィンの進化論がどのように形成されたのか、その理論構造がどのように説明されるのかという問題
- ②ダーウィンによって経済学にもたらされた方法論的インプリケーションが何であったのかという問題
- ③ヴェブレンのダーウィン解釈が正しかったのかどうかという問題
- ④ヴェブレン流ダーウィニズムの理論的構造がどのように説明されるのかという問題
- ⑤ヴェブレン流ダーウィニズムが示唆する社会像ないし未来像がどのようなものであったのかという問題

言うまでもなく、これらの問題は、相互に関連するとはいえず、まったく別の問題である。ダーウィンとダーウィニズムは同じではない。それどころか、ヴェブレンの進化概念が必ずしも生物学の範疇に収まるとは限らない可能性もある。したがって、ヴェブレンの経済学構想を考察する場合、上記の諸論点の違いに注意深く配慮する必要があるだろう。

さて、このように論点を整理した上で、これらにつづいて発表された諸研究を評価するなら、ホジソンの議論が①に重点をおき、それをもとに④の解明を目指す研究であることが分かる。

Hodgson (2001b) は、ティルマンとは異なり、ヴェブレンが遺伝の観念を用いたことに、より積極的な意義を認める。まずホジソンは、生物学史の現代的解釈を整理し、進化論が変異、遺伝および選択という3つの中核的原理に支えられている

という仮説を立てる。そして、彼はこの3つの原理のすべてを最初に理解した経済学者としてヴェブレンを位置づけた。

ダーウィンといえば、自然選択説が有名であるが、自然選択だけでは進化は起こりえない。それどころか、仮に選択の概念だけが強調されるなら、自由競争やレッセ・フェールの教義により適した経済理論が想定されるだろう。しかし、選択が生じるためには、変異のメカニズムを経て生み出される多様性が不可欠であるし、選択された特質は遺伝によって保存ないし継承されねばならない。そのような整理によってホジソンが強調するのは、ヴェブレンの社会進化論の主題が制度や思考習慣の残存にあり、そこには、自然選択以外の二つの原理が組み込まれていたという点である。彼は、このようにして、マルクスやシュンペーターの進化思想や、ジョーンズが依拠したような古典派経済学と密接に関わるダーウィン像との境界を明らかにし、ヴェブレンの社会進化論を再構成しようとしている。

だが、社会科学が生物学的アナロジーを用いることに懐疑を示す論者も決して少なくはない。例えば、生物学的アナロジーは、自己組織化のメカニズムや、人為選択、人間の志向性を看過するという反論がなされてきた。したがって、ヴェブレンの社会進化論がこれらの論点を包含しているのか否かということも問題になってくる。この問題に取り組むのが Hodgson (2002) である。それによれば、ダーウィニズムは単なるアナロジーではなく、協同や志向性、自己組織化および人為選択のメカニズムも内包しうる、より一般的な存在論であった。そして、Hodgson (2008) は、この解釈に基づいて、④の問題に切り込んでいる。アナロジーないしメタファーではなく存在論であるというのはどういうことか。存在論としてのダーウィニズム、言い換えれば、一般化されたダーウィニズムは、「社会と生物界の両方に共通する抽象的特徴に依拠する」(Hodgson, 2008, p. 400) 立場を意味するのであり、ホジソンによれば、

ヴェブレンは、「社会経済システムが、変異、遺伝および選択というダーウィンの概念と一致する仕方で実際に進化したということ」を明らかにした (Ibid., p. 403). すなわち、ヴェブレンにおいては、自然的秩序と社会的秩序が共通の原理によって理解されていたということになる<sup>9)</sup>.

それに対して、Tilman (2007) は、②の論点の解明を基礎としながら、⑤の論点へと向かう。すなわち、ヴェブレン流のダーウィニズムが示唆する社会像ないし未来像である。そして、彼の研究の特徴は、経済学に対する進化論の科学的インプリケーションのみならず、その政治的およびイデオロギー的インプリケーションにも目を向けている点にある。

ヴェブレンがしたように率直に解釈するなら、ダーウィンの進化論の帰結は、善なるものでも悪なるものでもないものであり、ただ非目的論的な物質的ベクトルを示すにすぎない。つまり、ヴェブレンをこのような意味でのダーウィン主義者として解釈するなら、彼の理想の社会像を描き出すことがいかに難しいかが理解されよう。しかし、ティルマンは、ヴェブレンの進化概念がたとえ非目的論的であったとしても、したがって、彼の進化論的経済学が理想を描くことを禁じ、科学の営みにとどまらなければならないという示唆を含蓄するとしても、その見解の表明自体が「科学と理性を人類の潜在的解放者として描く」(Tilman, 2007, p. 186) 世界観につづじるものであると論じる。一見すると倫理的あるいは道徳的観念から切り離されているかのように見えるヴェブレンのダーウィン解釈が「科学的共同体の努力をつづじた人間の解放」(Ibid.) を実現する理想の社会像ないし未来像を含み込んでいるというのである。ティルマンの解釈は、懐疑主義もそれ自体が一種の価値表明でありうることを示唆しているといえるだろう。

また、ダーウィンの進化思想と社会科学の視角に関しては、興味深い論点がもう一つ残されている。それは、自然選択と人為選択という二つの選

択概念に関わっている。周知のように、ダーウィンの『種の起源』(Darwin, [1859] 1993) は、飼育栽培下における変異と選択を観察し、その上で自然においてそれに類似する選択がどのように生じるかを推理する構造となっていた。したがって、ダーウィンの進化論には二つの選択概念がある。そして、この二つの概念のインプリケーションを経済学に当てはめるなら、自然か人為かという対立軸は、改革主義ないし改良主義に対する是認あるいは否認という対立軸を浮かび上がらせることとなる。

この点に関しては、しばしば引用されるコモنز (John R. Commons, 1862-1945) の有名な一節がある。

だが、ダーウィンは、二つの種類の「選択」を心に抱いていた。——自然選択と人為選択である。われわれものは人為選択である。ヴェブレンのものは自然選択である。(Commons, [1934] 1990, p. 657)

ここで注意しなければならないことは、この自然か人為かという問題が、理論構造の解釈をめぐる④の論点を超えて、⑤の論点につづじる側面を持っていることである。すなわち、その思想家が、実際に社会的改良や政策の提言に積極的に関わる意志を持っていたのかどうか、そして、その視角が既存体制を超えうる批判であったのかどうかという問題である。

例えば、佐々野は、ヴェブレンとコモنزらの世代の間には、単なるイデオロギーの相違を超えた本質的な思想的相違があると主張する。そして、その境界は、資本主義制度の体制を超えようとしたかどうかにある。彼によれば、ヴェブレンは、「体制を超えた『変化』にまで説き及んでいた」(佐々野, 2003, p. 40) のに対して、ミッチェル (Wesley C. Mitchell, 1874-1948) やコモンジズは、あくまでも「資本主義『制度』の体制内における『変化』を問題とした」「改良主義の経済学者」

(Ibid., pp. 49, 40)にとどまっていた。さらに、経済学史上の位置づけとの関連で、この視角を敷衍するなら、それぞれの論者の議論が既存の経済理論の修正にとどまるのか否かという論点も引き出される。この佐々野の議論の特徴は、⑤の論点の解明を積極的に見据えているところにあるといえよう<sup>10)</sup>。

いずれにせよ、ジョーンズが提起した問題と、ヴェブレニアンによるそれへの回答が示していたのは、経済学と進化思想の関係を問うことの難しさである。ダーウィンの理論形成とダーウィニズムの解釈の問題、そしてそれらとヴェブレンの関係は、異なる層の論点が絡み合わざるをえない側面を持っている。だが、少なくとも諸論点の混在を自覚した上で考察を進めるなら、無用な論争が避けられるのは言うまでもない。本稿では、試みにそれらの論点を5つに分けたが、ホジソンのような視角は、④ヴェブレン流ダーウィニズムの理論的構造へと向かうものと位置づけることができるし、ティルマンや佐々野のような視角は、⑤のヴェブレン流ダーウィニズムの社会像ないし未来像へ向かうものと位置づけられる。その場合、各々の問題の根底にあったのは、例えば、進化概念を目的論的と見なすか、あるいは非目的論的と見なすかという論点であった。

この目的論の問題は、次に見るように、経済学における事実認識、言い換えれば、経済学が取り扱うべき因果関係の問題とも関わっている。そして、この論点は、自然の進化プロセスに目的を帰属することを禁ずるとしても、現実の人間や集団が抱く目的をどのように取り扱うべきかという問題を生じさせた。さらに、この論点は、ヴェブレンが倫理的あるいは道徳的に相対主義的であったのか否かという重大な問題をも内包していた。以下、前者の問題は次の第3節において、後者の問題はつづく第4節において考察される。

### 3. 生物学を超えた進化概念

人間の行動を説明しようとするとき、少なくとも

も二つの説明が可能であると考えられる。Dretske (1988)によれば、一つは、生物学的ないし神経生理学的な説明であり、もう一つは、心理学的な説明である。例えば、行動は、中枢神経系から発せられる電気的インパルスに対する反応としても説明できるだろう。だが、行動は、神経系における電気的および化学的出来事にすぎないのか。この説明方法がいかに科学的根拠を有するとしても、人間の行動を社会科学において説明しようとするとき、それはどれほど役立つのか。

ドレツキによれば、神経生理学的な説明は、身体運動の原因としての構造や過程に関する説明ではあっても、なぜわれわれが行動するのか、すなわち人間が行動する理由——われわれの信念、欲求、目的、計画——を説明するわけではない。前者が人間の行動が引き起こされる原因に関する説明であるとするれば、後者は、人間が行動を引き起こす理由、すなわち動機に関する説明である。両者はともに行動の説明には違いないが、それらは明確に区別されねばならない。

ヴェブレンは、古典派経済学の根底にある快樂主義的心理学を批判したが、その論理は、この二つの説明方法の区別に通じる側面を持っている。

イギリスの経済学者のものであろうと、大陸の経済学者のものであろうと、広く受け入れられている経済理論の定式化のすべてにおいて、その探究が関わる人間という素材は快樂主義的な見地で理解されている。すなわち、それは、受動的で、実質的に生氣のない、たえず所与の人間本性という見地である。……快樂主義的な人間は、精神的な意味では原動力 (prime mover) ではない。(Veblen, 1898, pp. 73-74)

快樂主義的な人間像は、行動の受動的側面、すなわち人間の行動が引き起こされる原因を説明するにすぎない。では、原動力としての人間が行動を能動的に引き起こす理由、すなわち動機はどのように説明されるべきか。ドレツキのように原因お

よび理由という概念的区別を用いたわけではないが、ヴェブレンがこれに類似する区別を念頭においていたことが分かる。

したがって、ヴェブレンは、進化論的経済学が快樂主義に代わる新しい心理学に基づかねばならないと考えていたが、新しい心理学と快樂主義の違いに関しては次のように説明している。

快樂主義が（起こりうる）行動の帰結のうちに行為の因果的決定要因を探し求めるのに対して、その後の構想は、人間を機能する行為主体、すなわち人格と見なす諸性向の複合体のうちに、この決定要因を求める。人間の行為であるはずのものを最終的に決定する快樂（pleasure）の代わりに、行為に帰結する向性的諸性向が、最終的に、快いはずのこと（what shall be pleasurable）を決定するのである。（Veblen, 1900, p. 156）

新しい心理学は、快樂主義のように快樂を人間行動の決定要因と見なすのではなく、人格の諸性向、いわば「快いはずのこと」を決定する機能的主体に目を向けていた。ここに、ヴェブレンが当時の新しい心理学、向性論の意義を積極的に評価していたことを読み取ることができる。また、この言説から、快樂主義が厳しく批判されたにもかかわらず、それによって人間の行動が快樂と不可分であるという理解が否定されたわけではなかったことも分かってくる。人間の快樂は、ヴェブレンの人間行動論においても重要な道標となっている。むしろ彼の論点は、心理学における観点の転換にあった。

行動の規定要因は、概念としての快樂にではなく、快樂を引き起こす人間本性に見出されなければならない。しかも、その本性は複数の諸性向からなる複合体である。つまり、ヴェブレンが提案するのは、快樂が行動を引き起こすという説明、すなわち、快樂によって行動が引き起こされるという説明ではなく、行動を起こす人間は、どのよ

うな複合的な動機によって、快さや痛みを感じるのにかに関する説明であったといえる。快樂主義の説明は、行動が受動的に引き起こされる原因を快樂と見なす限り、上記の電氣的インパルスによる説明に似ている。だが、この説明では、人間が行動を能動的に引き起こす理由、すなわち動機は、その考察から省かれてしまう。そして、快樂主義の立場から描かれる人間が、受動的で所与の人間であるとしたら、過去も未来も、先祖も子孫も持たない人間ということになる。この人間像が、ヴェブレンが重視した進化や累積的な因果関係の概念と相容れないことは想像に難くない。

とはいえ、この人間と進化に関するヴェブレンの議論は一つのパラドックスを抱えている。彼の進化概念が目的を持たない変化を意味するとしたら、人間の能動的側面は、彼の進化論的経済学の枠組みのなかでどのように位置づけられるのか。阪上が指摘するように、進化のアナロジーを用いたヴェブレン経済学構想には、依然として次のような問題が残されている。生物の進化においては目的も意志も働かないとしても、人間の社会や経済においては、個人や集団の目的や意志が大きく関与する。しかもゲームのルール自体を変えるとすることが起こる。そうだとすれば、進化論のアナロジーだけで社会や経済を考えることは可能であるのか（阪上, 2001, p. 11）。

ここでは注意しなければならないこともある。確かに、ヴェブレンは、自然的法則、正常な傾向および均衡状態を措定することを非人格的継起に目的を帰属することと見なし、そのような思想を目的論的体系として批判した。だが、すでに見たように、そのことによって、人間の目的あるいは能動性が否定されたわけではなかったということである。その意味では、ヴェブレンの目的論批判は、思想家が帰属する目的の所在を問題としていたということもできるだろう。もっとも、彼の経済学構想のなかで、そのことをどのように意味づけるかという問題は残される。

そして、Hodgson (2001b) が取り組むのはこ

の問題である。彼によれば、ダーウィニズムは二面性を持っており、理論的教義であるとともに、哲学的教義でもあった。換言すれば、ダーウィニズムは、第一に生物学理論を指している。だが、それと同時に、それは、認識論的ないし存在論的議論の再考をもたらしたということである。そして、ダーウィニズムが社会科学に投げかけた問題の一つは、因果性をいかに捉えるかという伝統的な問いであった。ホジソンは、ダーウィニズムについてのヴェブレンの議論が、生物学理論というよりは、認識論的ないし存在論的領域に関わっていたと解釈する。したがって、ヴェブレンの進化概念は必ずしも生物学だけに還元されるわけではなかったという可能性が、ここで再び頭を擡げてくるのである。

ホジソンが提起する問題はこうである。因果性の概念は、自然科学と社会科学では異なるのか、また異なるとしたら、それらはどう関係しているのか。すなわち、社会科学において、「因果の二元性 (causal dualism) —— 志向的因果性 (intentional causality) と機械的因果性 (mechanical causality) ——」(Hodgson, 2001b, p. 386) は、どのように理解されるべきか。これは、先のドレッキの原因と理由の区別とも関わらないわけではない。それどころか、この区別がアリストテレスの作用因と目的因の区別にまでさかのぼれることは周知のところであろう。

作用の因果性は、現代の自然科学の唯物論的あるいは機械論的な因果性に似ている。目的の因果性あるいは「十分理由律」は、目的論的な性格を帯びている。すなわち、それは、志向、目的あるいは目標によって導かれる。……自然科学者にとって、因果関係はつねに物理的な事柄を含んでいる。しかし、社会科学においては、志向的で目的のある行動が、人間および社会の領域の唯一の特徴と見なされている。(Ibid., p. 391)

もちろん、ホジソンは、社会科学においてどちらの説明が選択されるべきかという問題を提起しているのではない。そうではなく、問われているのは、この二つの因果性の概念が、そこでどのように結びつけられうるのかという問題である。ホジソンは、これこそがヴェブレンの挑んだ問題であったと考えた。

ホジソンによれば、今日の哲学的議論においてすら、因果の二元性の説明は依然として未決の問題である。そして、この問題に対して試みられてきた解答は、おおよそ次の3つであった (Ibid., p. 393, Table 1 から筆者が要約)。

- (1) 因果二元論 (Causal dualism) : 人間の志向は、神経システムに関わる物質的原因性を含意するだけでなく、それ自体が唯物論的用語には還元しえない特殊な類型の因果性をも含意していると説明される。ここでは、志向的行為と非志向的行動は区別され、思慮および推論の説明には、物理的因果性が含まれる必要はない。
- (2) 還元主義的因果一元論 (Reductionist causal monism) : 人間の志向は、人間の神経システム内での物質的原因の働きの結果であるにすぎないと信じられている。ここでは、機械やコンピュータと人間を含む生物の区別は消滅し、思慮および推論の説明は、唯物論的因果性の問題に還元されねばならない。
- (3) 創発主義的因果一元論 (Emergentist causal monism) : 人間の志向は、神経システム内の物質的原因のはたらきを持つ創発特性と見なされるが、物質的諸関係にもつばら還元されるわけではない。ここでは、志向は、将来の事象や諸帰結に関する意識的予測や内省的推論を含んでいるが、思慮および推論の説明は、唯物論的因果性を含むとともに、それに一致しなければならない。

思想史上、自由意志の擁護者と決定論者の間で繰

り広げられてきた伝統的な論争の多くが(1)と(2)の対立を背景としていた(Ibid., p. 392)とすれば、ヴェブレンの立場はどうか。ホジソンによれば、それは、ダーウィンとともに、M. A. プング、D. デヴィッドソンおよびJ. サールが属する(3)の創発主義的因果一元論に近い<sup>11)</sup>。

ホジソンは、この結論に対して、少なくとも二つの論拠を提出している。一つは、ヴェブレンが十分理由の探究、あるいは(ホジソンの言葉を借りれば)志向的因果性の探究を科学的推論のプロセスから排除することがなかったという事実であり、もう一つは、人間の知性を説明するさいに、生理学的アナロジーが消極的に捉えられていたという事実である。ここでは、このホジソンの示唆を手がかりにして、特に後者の問題を見ていくこととしよう<sup>12)</sup>。

ヴェブレンは、種としての人間の生活がその他の高等動物と同じように、「一般に種に授けられている本能的諸性向と向性的諸適性の総体」(Veblen, 1914, p. 1/訳, p. 3)によって左右されていると考えていた。そして、本能的諸性向には特別な役割が与えられていた。「これらの生来的な性向だけが、すべてのものを価値あるものにするのであり、生活の目的と効率ばかりでなく、生活の実質的な快樂と苦痛もまた同じように、生来的な性癖の作用から現れてくる」(Ibid.)。しかし、ヴェブレンによれば、当時の生物学者や動物行動心理学の研究者たちは、本能を科学的術語として用いることは少なかった。だが、彼は、社会科学が対象とする人間行為に関しては、事情は異なると考えていたように思われる。

解剖学や生理学では、適性について、本能は因果的に適性の基礎になっているとか、所与の本能の機能として作動し始めるという機械論的な見地から規定されたり、記述されたりするし、また、それぞれの本能の機能に含まれる定位や走性の運動の見地から規定されたり、記述されたりする。しかし、本能というものは、本書で

用いられているように、また広く理解されているように、そのような見地で規定されたり、記述されたりしてはならないのである。(Ibid., p. 4/訳, p. 5)

すでに見たように、向性論は、古典派経済学を批判するさいに(1900)、快樂主義の心理学に代わる新しい心理学と位置づけられていた。だが、1914年の議論においては、それは若干異なる役割を割り当てられている。向性は、本能とは対照的な意味を持たされているのである。人間行為の能動的側面を捉えうる点では、向性論は快樂主義とは一線を画する新しい心理学的成果とされていたものの、社会科学において人間の行為を説明するさいには、向性論のような機械論的な規定や記述だけでは不十分であるという見解が示されているからである。

そして、ヴェブレンにおける知性は、向性ではなく本能から引き出されてくる。ヴェブレンの議論において、本能とは、「……本能が価値あるものとする客観的な目的を意識的に追求すること」(Ibid., p. 5/訳, p. 6)を意味していたからである。そして、より厳密には、目的の設定は本能の仕事であり、その目的を達成する方法や手段の選択は知性の仕事とされていた(Ibid., pp. 5-6/訳, p. 7)<sup>13)</sup>。

したがって、コモンスが言うように、ヴェブレンにおける製作本能は、「あらゆる究極目的を達成するための方法と手段を顧慮する適合性の感覚(sense of fitness)」(Commons, [1934] 1990, p. 660)であり、芸術のみならず、宗教、法、産業における生産や組織化、およびビジネスに関わるあらゆる人間の性向に通底するものであった。「それゆえに、ヴェブレンは、目的を彼の製作本能に導入せざるを得ないし、それによって、ダーウィンの『自然』選択からダーウィンの『人為』選択へと改めざるを得ない」(Ibid., p. 661)。

ヴェブレンは、経済学が自然的法則や正常な傾向を導きだし、何らかの均衡状態を措定すること

を認めなかった。すなわち、非人格的継起に目的を帰属することを拒んだのである。しかし、これを裏返せば、そのことが、人間が目的論的性格を持つ存在であることを認めることであったということが明らかになる。ホジソンの力点もおそらくここにある。したがって、ヴェブレンが「諸制度や文化が生物学的見地ですっかり説明されうる、あるいは説明されなければならないということを受け入れなかった」ことは積極的に評価されることとなった（Hodgson, 2001b, p. 409）。

創発主義的因果一元論という術語は、ヴェブレンの進化論的経済学の構造を理解するために、ホジソンが現代の哲学的議論から借用してきた概念であるにすぎない。しかしながら、それは、機械論的な因果関係を否定することなく、人間の志向性、すなわち能動的側面を捉えるというヴェブレンのパスpekティブを理解する手がかりとなるという。それゆえに、ホジソンは、ヴェブレンを目的的行動に関わるいかなる概念も持たない機械論的決定論者と見なしたコモنزやR. ラングロワ（Richard N. Langlois）に反論している<sup>14</sup>。彼によれば、ヴェブレンの因果一元論は、知性や目的の放棄ではなく、「擁護しえない二分法の放棄」（Ibid., p. 407）を意味していたからである。つまり、それは、人間の目的や知性を機械的因果性に還元してしまう（2）と違うだけでなく、人間の目的や知性の存在意義を擁護するために、機械的因果性とは別に志向的因果性の枠を設ける（1）とも異なっているのである。

ホジソンによれば、創発特性の概念に類するものに基礎づけられたヴェブレンの社会進化論は、「生物学的現実によって影響を受けるが、生物学だけでは還元しえない、相対的に自律的な経済科学の概念」（Ibid., p. 409）に導かれた。そのことは、ヴェブレンの経済理論における進化が、複合的なレベル——生物学的なレベルと経済学的なレベル——で作動しているということの意味している。そして、その場合に、鍵となる概念が本能や習慣である。すなわち、「本能は行動を引き起こし、

習慣を生じさせる」が、「習慣は一方の生物学的領域と、他方の心理的および社会的領域とを結ぶ紐帯」である。そして、「いくつかの行動は本能の直接的発現であるだろうが、多くの場合、本能的性向は社会的文化の中で他者との相互作用をつうじて獲得された習慣や信念によって転用されたり、重ね合わされたりする」（Ibid., p. 417）<sup>15</sup>。また、習慣が自然的領域と社会的領域を結ぶ紐帯であるとするれば、信念と心的態度から構成されるヴェブレンの制度概念も、この役割の一端を担うということになる。まさしく、サールやヴェブレンを批判したコモنزが強調するように、「諸制度は諸個人の『外側にある』構造であると同時に、彼らの手の『内側にある』諸観念でもある」（Ibid.）からである。

ホジソンの研究に見られるように、ヴェブレンの思想に見られる二元性を一元的に再構成しようとする解釈は、決してこれまでに不在であったわけではない<sup>16</sup>。だが、ホジソンの解釈は、個人主義者や全体論者という還元主義者像に代わる新たなヴェブレン像を提示しただけではなく、彼の進化論的経済学の一元論的枠組みの解釈可能性を押し広げた点で重要であると考えられる。彼の議論は、問題の所在が、一元論か二元論かの選択にあるのではなく、ヴェブレンが因果の二元性を解決しようとした論理ないしプロセスにあることを教えてくれるからである。

しかし、ホジソンの解釈は、進化概念それ自体の検討によって、ヴェブレンの経済学構想の構造を解明しようとするものである。したがって、ヴェブレンのいう進化が生物学を超えた概念であるとしても、彼の議論においては、ヴェブレンがなぜそのような構想に至ったのかという問題の扱いは小さい。

例えば、ホジソンにおいては、ヴェブレンの若き日のカント研究（Veblen, 1884）は、それほど重視されておらず、それどころかカントは、（1）の因果二元論に属する思想家と位置づけられている。ヴェブレンが創発主義的一元論に類する構想

へ向かったのは、何よりもダーウィンの影響に拠っていると解釈されているからである。しかし、少なくともヴェブレンが研究対象とした第三批判『判断力批判』が、まさにホジソンが問題とした因果の二元性の解決——機械論と目的論の調停——を主題としていたという事実はどのように受け取られるべきか<sup>17)</sup>。ヴェブレンに対するダーウィンの影響がカントのそれより強かったとしても、因果性の問題を取り扱うなら、若き日の哲学研究を再考する意義は決して小さくない。ヴェブレンの進化概念を生物学を超えた概念と解釈するのならば、なおさらダーウィニズムの影響下であって、ヴェブレンがそれをどのような思想的フィルターを通して咀嚼したのかということが問題とならざるをえないからである<sup>18)</sup>。

ヴェブレンは、ダーウィンに従って、科学が非目的論的でなければならないと論じる一方で、それと同時に、進化論的経済学が人間の能動的、目的論的な行為を主題としなければならないことを強調した。このように、ヴェブレンの目的論の概念は「二重の意味」(石田, 2007b, p. 22)を持っていた<sup>19)</sup>。フォレストティによれば、ヴェブレンの問題は、「観察された現象を説明するために、経済主体の目的論的な構想と、非目的論的な因果の原理とを調停させるという問題——すなわち、人間行為を本質的に多様であると考えようとする経済学という科学にとって中心的な問題——」(Foresti, 2004, p. 408)であったし、彼のダーウィンのかつ非スペンサー的な進化概念の源泉はカントにあった。そして、石田 (2007b, p. 28) は、そこに、「初期哲学研究以来、彼の思索の基礎にあった、目的論的性格を有するのは人間であって自然ではないという社会認識」があったと考える。

ヴェブレンの非目的論的な科学の提唱が目的論からの解放を意味しているのは確かである。だが、同時に、その問題提起は、因果の二元性をいかに解決するかという論点とも不可分であったということができよう。

もっとも、本節で取り上げた論者の接近方法は

異なるが、取り扱われている問題は非常に近い。ホジソンは、現代の生物学史と科学哲学上の諸議論を手がかりに、ダーウィニズムの解釈可能性を押し広げることによってこの問題に取り組んでいる。それに対して、フォレストティおよび石田は、ヴェブレンが実際に筆を執った諸思想を辿ることによって、この問題に接近しようとしているからである<sup>20)</sup>。そして、これらの議論が生じてきた背景には、Rutherford (1998) が引き出した重大な結論——ヴェブレンの進化論的経済学のプログラムは失敗に終わる矛盾をはらんでいた——があったことを付け加えておきたい<sup>21)</sup>。

#### 4. 進化論的経済学と倫理的相対主義

F. ナイト (Frank H. Knight, 1885-1972) は、経済学方法論に関するヴェブレンの議論が集められた論集『近代文明における科学の位置』(Veblen, 1919) に対して次のような書評を寄稿した。

著者〔ヴェブレン——引用者〕の主要関心は、道徳化の試み (moralizing) を経済学からすっかり根絶し、経済学を一つの「科学」に還元することにある。彼の嘲笑は、あらゆる形式の「正常性 (normality)」に浴びせかけられている。科学を道徳化の試みから切り離すという意味で、これ以上に価値があり必要な仕事はないということは認められねばならない。その二つのことはひどく混同され、しかも過去には両者に極めて不利となるほどまでに混同されてきたのだから、極端すぎるとともに意地の悪いユーモア感覚にもかかわらず、経済的諸原理に関する議論をしばしば険しく醜い諸事実へ引き下げる上で、ヴェブレン氏が行った研究が貴重なものであることに反論する者は誰もいないだろう。(Knight, 1920, pp. 518-19)

この評論に若干の解説を加えると、「正常性」に対するヴェブレンの嘲笑とは、彼の経済学批判の視角を指している。ヴェブレンにおいては、経済

の「正常性」の想定は、経済的諸原理における何らかの均衡状態の措定を含み、科学ではなく道德化の試みに端を発している、あるいは、それが科学と道德化の試みという異なる領域を混同することによって生じた理解であると見なされた。そして、ナイトによれば、ヴェブレンの実際の経済学的議論は極端すぎるし、意地の悪いユーモア感覚に基づいていたが、それにもかかわらず科学的考察と道德的考察という異なる二つの領域の区別が不可欠であることは確かである。それゆえ、その区別を明確にしたヴェブレンの研究は貴重な研究であったと評価されている。

この評価は、ヴェブレンが道德的考察には目もくれない一種の科学主義者であったかのような印象を与える。だが、ナイトは、ヴェブレンを文字どおりの純粋な科学主義者と解釈したわけではなかった。

まずナイトは、ヴェブレンの産業的価値と金銭的価値の区別には理論的欠陥があると主張する。「体裁の維持」(Veblen, 1891, p. 399)に関わる金銭的価値は、「人間に糧を与え」、「栄養を与える」(Veblen, 1899a, pp. 90, 91)、人間の「自然的」欲求 (Veblen, 1899c, p. 128) の充足につづじる産業的価値と明確に区別されている。だが、ナイトはこの区別に疑問を呈している。商品の金銭的価値が及ぶ領域、言い換えれば、生活の審美的側面は、体裁の維持だけに限られるのか。人間と獣の境界が生活の審美的側面にあるとしたら、金銭的価値と関わらない人間の生活は、獣のそれと変わらないということにならないか<sup>22)</sup>。

しかし、ナイトの解釈によれば、ヴェブレンは人間と獣の生活の相違を看過したわけではない。そうではなく、「彼は、おそらく『不適切な仕方』——すなわち、彼が否認するような仕方——での体裁の維持だけを否認するつもりで言っているのだ」(Knight, 1920, p. 520)。したがって、ナイトは、ヴェブレンの書が一種の科学主義のベールに包まれているにもかかわらず、「ヴェブレンの支持者であろうとなかろうと、社会的諸問題に関わるす

べての思慮深い研究者たちは、それが必携の一冊であることを悟るだろう」と述べた (Ibid.)。ヴェブレンの科学主義は、道德的考察をすっかり捨て去ろうとしているように見えるが、少なくともナイトは、ヴェブレン自身の価値判断——是認や否認——が、その経済学構想に織り込まれていると読んだからである。

しかしながら、ヴェブレン研究においては、ナイトのような解釈だけがなされてきたわけではない。例えば、Samuels (1990) は、経済科学の前提観念 (preconceptions) に関するヴェブレンの議論を極めて注意深いテキスト解釈に基づいて考察することによって、端的に言えば、ヴェブレンの進化論的経済学の立場は、倫理的に相対主義的であったという結論を引き出した。

サミュエルズは、ヴェブレンが科学者の精神と考えた事実問題性 (matter-of-factness) に焦点を当てている。ヴェブレンの経済学批判は、経済学のアニミスティックあるいは目的論的な性格に向けられたが、このアニミスティックあるいは目的論的な因果関係の把握は、ダーウィンのな目的のない、進化論的な累積的因果関係の把握の仕方とは異なるものと位置づけられていた。

例えば、アニミスティックあるいは目的論的な思想の典型とされたのは、自然的である道德的法則や物理的法則を探し求めた18世紀の自然法思想であり、その思想的基盤の上に立って、経済における自然的法則を探究したアダム・スミスであり、自然的法則を正常な傾向へと読みかえ、均衡の概念を発展させていった19世紀のマーシャルであった。ナイトが目指した「正常性」に対するヴェブレンの嘲笑もこのことと関わっている。自然的法則、正常な傾向、あるいは均衡状態は、何らかの最終的あるいは究極的目的を示唆しているとも解釈しうるのであり、ヴェブレンによれば、経済に関わるこの理解は、ダーウィンが教えるような目的のない、累積的な因果関係とは違って科学的ではない。

ダーウィンの因果関係は、アニミスティック

な観点あるいは前提観念ではなく、事実に即する観点あるいは前提観念によって認識されると見なされた。前者は「目的論的な継起や相互関係の議論」をもたらす非科学的な精神態度、それに対して後者は「因果的な継起や相互関係の議論」をもたらす科学的な精神態度と結びつけられている (Veblen, 1899a, p. 100)。したがって、進化論者ヴェブレンが描く科学史においては、事実に即する前提観念は、アニミスティックな前提観念よりも上位におかれているように見える。そして、サミュエルズが事実問題性と呼んだものは、この後者の精神態度に関わっている。

古典派経済学者たちは、アニミスティックな前提観念によって、現実には存在しない自然的あるいは正常の傾向を非科学的に引き出しているという批判がなされた。そして、こうしたヴェブレンの科学史的理解には、ある時代の常識的信念ないし前提観念がその時代の科学的思考を導いているという論理が含まれていた。だが、サミュエルズによれば、この批判は、ヴェブレン自身の科学的立場とつきあわせるとき、循環論的な問題をはらむことになる。

すなわち、もう一方の事実に即する前提観念——ダーウィンをモデルにヴェブレンが選んだ科学的観念——も、理論形成を導く一つのバイアスであるのか否かという問題である。そして、この問題は、次のような疑問も生じさせた。ダーウィンの因果関係の把握法、事実に即する前提観念による科学の方法とされたものも、特定の時代あるいは社会に特殊な論理であったのか否か。そうでないとすれば、事実に即する前提観念が、アニミスティックな前提観念よりも近代的ないし科学的であると立証されるためのメタシステムは存在するのか。また、それが存在しないとすれば、ヴェブレンによる科学の前提観念に関する議論は、自己言及的であったということにならないか。複数の方法の優劣を比較するためのメタシステムがないとすれば、一方を他方よりも上位におくことはできないからである。

ヴェブレンは進化論的経済学という枠組みを提唱したが、ダーウィンの進化概念に従う限り、何らかの最終的あるいは究極的目的を彼が設定することはできない。したがって、彼はそれを新たな枠組みとして提唱しながら、それを究極的な経済学の方法としては提出できないという一つのパラドックスが生じることとなる。Samuels (1990, p. 707) の表現を借りれば、ヴェブレンの研究のなかには、「客観的、進化論的な経済科学者として研究を行うことと、その研究の主観的、規範的限界、すなわち、その自己言及的性質との間に存する緊張」が存在している。

サミュエルズの結論はこうである。ヴェブレンの進化論的経済学も、古典派経済学同様、その時代の常識的見解に導かれた状況依存的あるいはシステム特殊な枠組みであった。換言すれば、前提観念ないし常識を根底とする理論の限界あるいは相対性は、ヴェブレンの科学史観において、彼自身の科学的立場に対してさえ適用されるものであった。しかも、彼はそのことを自覚していたのであり、そのような意味で、彼が描いた科学史は自覚的に自己言及的であったし、解釈学的循環論の性格を帯びるものであった。それゆえに、サミュエルズによれば、ヴェブレンの立場は「文化的あるいは倫理的相対主義で一貫している」(Ibid., p. 711) 立場であったということになる。「事実に即していると考えられているものは、目的論的なものに劣らず理論や前提観念が負荷されたものである」(Ibid., p. 715)<sup>23)</sup>。

しかし、ここで注意しなければならないのは、サミュエルズが、ヴェブレンの科学的立場の自己言及性を消極的に捉えているわけではないということである。「前提観念が重要であるのは、それらが現実を覆い隠すからではなく、それらの制度化にとって、それらが道具的であるという現実を持っているからである」(Ibid., p. 715, 傍点——引用者)。サミュエルズの解釈では、たとえヴェブレンの事実に即する前提観念が状況依存的あるいはシステム特殊な枠組みであるという意味に

において相対主義的であるとしても、その枠組みを道具的に用いることは可能であり有用であるということになる<sup>24)</sup>。

この解釈に異を唱えたのは、サミュエルズの立場を「絶対的相対主義者 (absolute relativist)」と揶揄したランソンである。ランソンは、同時代の哲学者デューイの科学論を援用しながらサミュエルズに反論した。ランソンによれば、ヴェブレンが強調した事実に即する前提観念は、アニミスティックあるいは目的論的な前提観念に代わる科学者の精神態度ではない。そうではなく、事実に即する前提観念は、むしろ「あらゆる絶対主義的な前提観念に基づく循環論的誤謬を回避するという、知覚および構想を関連づける唯一の手段」(Ranson, 1991, pp. 844-45)であった。その意味で、「科学的言語は、意味が『集団の活動、集団の利益、慣習や諸制度によって一貫性を得る』常識的言語——サミュエルズが不可避的に事実に関するすべての主張の根底にあると主張する『状況あるいはシステム特長的』前提観念——とは区別されねばならない」(Ibid., p. 845)。

アニミスティックあるいは目的論的である思想が一種の絶対主義的立場であるとするなら、それを退けたヴェブレンの立場は相対主義的立場ということになるかもしれない。ランソンは、サミュエルズの議論がそのような推論に基づいていると考え、そこには、彼が無意識に執着する前提観念——探究に二元論を強いる「デカルト的悪癖」とウィリアム・ウォーラーが呼んだ前提観念——が潜んでいると断じた。「だが、選択肢は相対主義者か絶対主義者かのどちらかだと、いったい誰が言ったのか」(Ibid.), と<sup>25)</sup>。

しかし、サミュエルズはこのランソンの批判に次のように答えている。確かに相対主義には欠陥があり、二律背反を生み出すあらゆる哲学的立場にも欠陥がある。だが、彼は、相対主義には何の可能性も残されていないのかと問う。「相対主義は開放性を可能とし、早まった議論の帰結を避けるという点で、道具的に有用であるように私には

思われる。また、制度派経済学のすべての分派がそうしているように、解釈のスタンスの中核をなすものとして、進化、プロセスおよび累積的因果関係を熟考する社会科学のあらゆるアプローチでは、それは極めて重要な考察であるように思われる。」(Samuels, 1991, p. 848)<sup>26)</sup>。本稿第2節の区分を用いるなら、サミュエルズの議論の特徴は、⑤の論点をもっぱら未決問題として避け、④の論点に解釈を限定している点にある。だがそれにもかかわらず浮かび上がるのは、進化論をモデルとする科学的立場が、それに拠って立つ思想家の道徳的あるいは倫理的立場といかに深く関わっているかということである。この問題に焦点を当て、ヴェブレン研究の歴史を極めて明快に整理しているのがLawson (2002)である。

ローソンは、上記の問題に関連して、これまでのヴェブレン解釈を二つの種類に分けている。一つは、エアーズや多くの制度主義者たちの解釈であり、もう一つは、サミュエルズやポストモダニストたちの解釈である。

ヴェブレンは、1898年に「経済学はなぜ進化論的の科学ではないのか」(Veblen, 1898)という論文を書いた。そして、この問いを文字どおりに受け入れたのがエアーズや多くの制度主義者たちであった。ローソンによれば、彼らがヴェブレンの意図と解したのは、正統派経済学の放棄であり、それに代わる進化論的経済学という新たな構成的研究プログラムの構築であった。その意味では、彼らは、ヴェブレンの上記の問いを、「[経済学は——引用者]進化論的の科学にならねばならない」(Lawson, 2002, p. 280)という提案であると解釈した。だが、確かにこの問いは、そう「ならねばならない」、あるいは、それを「構築しなければ」という積極的提案と受け取ることも可能である。とはいえ、ヴェブレンのテキストを正確に解釈するなら、その問いは、もう一つの側面を垣間見せることとなる。すなわち、その問いは、現実に、経済学が進化論的の科学の方向に向かいつつあるという予測とも解釈しうるのである。ヴェ

ブレンの問いは、一つの構成的研究プログラムの構築の提案であったのか、あるいは、それは経済学史の現状の予測にすぎなかったのかという問題が生じた。

Samuels (1990) が強調するように、進化論的経済学の方法が正統派経済学に比べて「より良いか、あるいは悪いか、より価値があるか、あるいは適切であるか」に関して、ヴェブレンは何ら断定的な判断を下していない (Veblen, 1898, p. 81). 彼は、自らの科学的立場に対しても自己言及的でありつづけた。したがって、サミュエルズは、ヴェブレンの上記の問いをエアーズらのように、積極的提案と解釈することはなかった。なぜなら、彼の解釈では、ヴェブレンのパーспекティブは、「そのような規範的比較の推論をまったく認めない」からである (Lawson, 2002, p. 282).

サミュエルズは、ヴェブレンのいう事実に即する科学の構想を、アニミスティックあるいは目的論的な科学に代わるものと捉えたが、ローソンはこれに反論している。ローソンによれば、ヴェブレンの進化論的経済学の構想は、一つの存在論的プロジェクトの提起であり、「事実問題性は『派生的』ではなく、いくぶん強制的なものに見なされていた」(Ibid., p. 286). これは、数学的形式主義を利用する近代的科学者ですら、いかに因果関係に関わる形而上学的観念を拒絶しようとしても、諸事実に因果的継起を帰属せざるをえないというヴェブレンの議論 (Veblen, 1908, p. 33) を論拠にしている。彼の進化論的経済学は、事実問題性だけで説明されるものではなく、むしろそれは、方法の問題、「累積的因果関係に関わる一つの存在論」(Lawson, 2002, p. 287) であったのであり、だからこそ、彼は、進化論的科学的成果が単に現実主義的記述を意味するにすぎないと誤解されるのを恐れた。

ローソンによれば、正統派経済学を放棄し、進化論的経済学という新たな構成的研究プログラム枠組みを一から構築しなければならないというエアーズらの主張には無理がある。だが、それが

まったく状況あるいはシステム特殊的な枠組みであり、相対主義的であったというサミュエルズらの主張にも困難がある<sup>27)</sup>。そうではなく、ヴェブレンは、彼が進化論的科学的な方法と考えていたものに諸科学が向かいつつある状況のなかで、経済学に何が欠けているのかを模索していたということになる。

ヴェブレンの経済学方法論の一貫した説明を追究しようとするサミュエルズの視角は、ヴェブレンのテキストを忠実に解釈し、その理論的構造を明らかにする上では、おおむね妥当であるといえる。だが、事実問題性に関するヴェブレンの議論には、サミュエルズの説明が及ばない側面があることも確かである。

ヴェブレンが科学における事実問題性を強調するとき、それは確かにアニミスティックあるいは目的論的な精神態度の払拭を意味し、ナイトが述べたように、経済学からあらゆる道徳化の試みを根絶することを示唆しているように見えた。だが、スミス論に見られるように、ヴェブレンの事実問題性の重視が、逆説的にも、平凡な人間の生活習慣や生活条件、そして彼らが直面する諸問題にとって有意義な価値が取り扱われねばならないという、すぐれて実践的な意図をも内包していた (石田, 2008a) ことはどのように受け止められるべきか。事実問題性の含意に関するこのヴェブレンの二面性を念頭におくとき、倫理的相対主義者というヴェブレン像は、的を射ているとはいえ、あまりにも安直にすぎるように思われる。事実即する前提観念とアニミスティックな前提観念は、確かに対立的な概念としておかれていたが、それらが代替的な概念であったかどうかは、依然として議論の余地を残しているからである。

この点について考察する場合、サミュエルズに対する次のラザフォードの指摘<sup>28)</sup>も重要であると考えられる。ラザフォードの問いはこうである。たとえサミュエルズが主張するように、ヴェブレンの経済思想に認識論的あるいは方法論的な意味における究極的根拠が不在であると断定でき

るとしても——それゆえ相対主義的であるとしても——生物学的な意味における究極の根拠が絶対に存在しなかったといえるだろうか。ラザフォードによれば、しばしばヴェブレン研究者は、職人らしさや事実問題性が種の存続にとって特別な意義を持っているという示唆を、ヴェブレンのテキストのなかに暗黙に見出す<sup>29)</sup>。つまり、進化する社会における人間の基本的な本能的資質や種の保存のための生活プロセスが、彼のテキストのなかでどのような意味を持たされていたのかという問題である。

ヴェブレンは、多くの論稿において、当時のキリスト教国の諸国民が直面した「愚鈍な諸制度 (imbecile institutions)」の勝利 (Veblen, 1914, p. 25 / 訳, p. 22) や、社会における人々の「生活の諸目的にとっての有用性 (serviceability)」を機能的 content とする「知的かつ目的論的な」(Ibid., pp. 31, 32 / 訳, p. 26) 本能的行動について紙幅を割いた。ここに、解釈者がその行間をどこまで汲み取るべきかという問題が生じる。すなわち、なぜヴェブレンは、制度を「愚鈍」と形容し、人間の行動を「知的かつ目的論的」と形容したのか。したがって、ヴェブレンの言説が、サミュエルズが主張するように倫理的相対主義の範疇内にあるとしても、少なくとも、その相対主義的視角それ自体の含意をさらに掘り下げる余地は、依然として残されているといえるのではないだろうか。

## 5. おわりに

### ——新たな解釈の方向性を求めて——

進化の概念はもともと生物学の範疇を超える途方もない広がりを持っていたから、社会科学においてその概念の理解を進めることは実に難しかった (第2節)。ポーターが揶揄したように、進化は極めて「伸縮自在な呼称」であったし、ホフスタッターが指摘したように、進化論は、対立的なイデオロギーさえも支えうる「中立的な道具」(Hofstadter, [1944] 1992, p. 201 / 訳, p. 244) であったからである。それゆえに、ヴェブレンの進

化論的経済学の構想をどのように理解するかという問題も紛糾を極めてきた。

例えば、ラザフォードによれば、ヴェブレンの経済学構想は、アウトラインが描かれたにすぎず、不幸にも次世代に受け継がれることはなく、それゆえに、それは、「果たされなかった約束」に終わった。さらには、そのヴェブレンの経済学構想の再構築を目指すホジソンによれば、この研究プログラムは、今日においてさえ、鍵となる諸概念を解説する段階にようやく到達したにすぎない (Hodgson, 2008, p. 404)<sup>30)</sup>。おそらく、その一因は、ホジソンが的確に指摘したように、ヴェブレンの議論の多くがメタ理論的であったにもかかわらず、彼がそのメタ理論の体系の構築自体には着手しなかったことにあるといえよう (Hodgson, 2001a, p. 148)。

本稿の議論を振り返るなら、進化論をモデルとする経済学が、経済社会をどのように分析すべきかという問題が提起されていた (第3節)。ヴェブレンは、古典派経済学の経済人の概念には批判的であった。なぜなら、それは、過去も未来も持たない普遍的な人間像であったからである。したがって、進化論的経済学は、現実の人間の行動をいかに説明するかという心理学的あるいは認識論的問題と対峙することとなった。目的を持って行為する能動的な人間主体、すなわち現実に生きる人間をいかにして定式化するか、これである。したがって、この問題は、人間の現実的側面と生理学的側面をどのように調停させるかという問いも生じさせることとなった。

さらに、この問題は、人間および経済社会の説明のあり方にとどまるわけではなかった。進化論をモデルとする経済学がどのような思想的あるいは倫理的立場に依拠するべきかという問題とも深く関わらざるを得なかったからである (第4節)。進化が目的を持たない累積的な継起であるにすぎないとしたら、また、進化論的科學が取り扱うべき因果関係が目的のない累積的因果関係であるとすれば、科学者は事実即して淡々と人間および

経済社会を記述するほかはない。それゆえ、進化論的経済学を構築しなければならないという理想を掲げたヴェブレン、そしてヴェブレニアンたちは、科学主義あるいは倫理的相対主義とのジレンマに悩まされることとなった。

言うまでもなく、これらの問題は、古くて新しい問題といえよう。人間の行動ないし行為をいかに特徴づけるかという問題、そして経済学がその考察をどのように活かすかという問題は、経済学のみならず社会科学において長らく中心的な課題でありつづけてきたし、それどころかそれは、今日の経済学においてさえ無関係ではなく、研究者の関心を引きつつある問題だからである。Hayakawa (2007) が概観しているように、近年の行動経済学は、経済人——ホモ・エコノミカス——を現実の人間——ホモ・サピエンス——にいかにして進化させるかという問題に取り組んでいる。現実<sup>1</sup>に即した経済社会を描くことは、社会的ないし道徳的な本能および感情、言い換えれば人間の規範的価値を、いかにして諸個人の効用あるいは選好に埋め込むかという問題と不可分なのである。この視角が、ヴェブレンが目指した問題と隔たるわけではないことは明らかであろう。本稿で取り上げた多くの論者もすでに指摘しているように、ヴェブレンにおいては、たとえ自然からの目的の導出が不可能であるとしても、少なくとも人間という自然<sup>2</sup>、すなわち本能からの目的の導出は許されていたからである。

最後に、その点を考慮した場合、そもそもヴェブレンのいう事実に即する科学者の精神態度は、倫理的相対主義に帰結するものであったのだろうか。確かに、それは、道德化の試みを捨て去り、経済学の科学化を求めるものであった。だが、それは、それにとどまらず平凡な普通の人間の日常生活に関わる価値を取り扱わねばならないという科学者の実践的な精神態度をも含み込んでいたのではなかったか。科学者がどのようにして事実と向き合い、その成果を経済社会にどのように還元しようのかという問題が、明言はされずとも、

ヴェブレン研究者を悩ます以上に、彼に重く押し掛かっていたということを否定する根拠は見あたらない。しかし、この問題は、意外にも正面から取り上げられずにきたように思われる。科学と実践的領域の関係をめぐるヴェブレンの立場とはどのようなものであったか。進化思想とヴェブレンの経済学構想の関係を考える場合、本稿において紹介してきた諸研究の論点の他にも、こうした問題も提起しうるのではないだろうか。

(日本大学経済学部助手)

[付記] 本稿は、2005-07年度日本大学経済科学研究所プロジェクト「経済の変化とその対応」における研究成果であるとともに、2008年度日本大学学術研究助成金（一般研究（個人））の交付を受けた。

## 注

- 1) 本稿における他言語文献からの引用は、邦訳書がある場合でも必ずしもそれに従っていないことを付記しておきたい。また、引用文中の傍点は、「——引用者」という表記がない限り、原著者による強調である。引用者による文章の補足にも同じ表記を加えている。原著者による強調は、イタリックには傍点「ゝ」を、大文字で始まる単語には傍点「・」を加えて区別した。
- 2) 19世紀後半アメリカにおける進化論の受容に関しては、中山によるダーウィニズムの分類も参照（中山, 1974, p. 29）。
- 3) ジョーンズは、この解釈をサンドラ・ハーバートに依拠している。
- 4) その他、ヴェブレンの「進化論的方法」は説明不足であるというグルーチャー（Allan G. Gruchy, 1906-90）の言説に添えて佐々木（1995, p. 76）は次のように述べる。「ヴェブレン自身も、ダーウィンの進化論で自己の理論や方法がすべて論議できると考えていなかった。それをヴェブレンの研究者たちがすべてダーウィンのそれで割り切れると考えるのは行きすぎであるといわねばならない。」佐々木のダーウィン解釈について

は、特に佐々木（1998, p. 58）も参照。なお、ヴェブレンの社会進化論が生物学的議論の枠内に収まるのかという問題は、本稿第3節の本題でもある。

- 5) ジョーンズのリーバフスキーに対するリプライは、Jones（1990a）を参照。だが、ジョーンズが指摘するように、リーバフスキーの批判は、パースやデューイとの知的関係の可能性を示唆するだけで、ジョーンズの本質的な問題提起には答えていない。
- 6) テイルマンは、この解釈をピーター・ボウラーに依拠している。ボウラーの生物学史については、本稿の注8）も参照。また、ジョーンズのテイルマンに対するリプライは、Jones（1990b）を参照。
- 7) 例えば、そのことを例証するのは、ヴェブレンの諸論稿間におけるダーウィン評価の変化である。進化論的経済学を提唱した論文「経済学はなぜ進化論的科学ではないのか」（Veblen, 1898）は、プレ・ダーウィニアンおよびポスト・ダーウィニアンという区別を経済学史解釈に用い、処女作『有閑階級の理論』（Veblen, 1899b）は、制度の「自然選択」について論じているが、『営利企業の理論』は、ダーウィンの進化論、特に累積的な変化プロセスにおける諸要因に関する解答とその帰結に対して疑問が投げかけられていることに言及している（Veblen, 1904, p. 370／訳, p. 293）。さらに、『製作本能論』では、進化のダーウィンの概念が目的論的想像力に少しも染まっていないのかどうかは未決の問題であることを認めてさえる（Veblen, 1914, p. 328／訳, p. 267）。また、理由は不明であるが、『有閑階級の理論』は、当初の副題「制度の進化に関する経済学的研究」から「進化」が削られ、「制度の経済学的研究」へと改められた。Dorfman（[1934] 1972, p. 323／訳, p. 457）によれば、変更は廉価版が出版された1912年とされているが、高（2006, p. 46n）によれば、それ以前（初版の第2刷）にもすでに変更が見られる。

- 8) 19世紀後半を特徴づけたのは、ダーウィンの進化論の普及だけではなく、遺伝に関する研究の進展であった。後者の最も極端な展開は、特に世紀の転換期には、最初はイギリス、つづいてアメリカにおいて生じた優生学とそれにまつわる社会的運動である。ホフスタッターによれば、ダーウィンの従兄弟であるゴルトン（Francis Galton, 1822-1911）を中心に優生学の基礎が築かれていったが、この動向は、「ダーウィン化された時代の習慣」に合っていた。その背景には、「世紀末における景気の後退が国家の衰退の始まりであるかのように多くの人々に思われていた」ことがあった。この動向は1860年代から展開されていたが、世紀末にはいくつかの生物学的な発見——特に、1900年のド・フリース（Hugo De Vries, 1848-1935）らによるメンデル（Gregor Johann Mendel, 1822-84）の遺伝学の再評価——によってさらに拍車がかかった（Hofstadter, [1944] 1992, pp. 161-3／訳, p. 195-97）。そして、ボウラーが従来の生物学史で看過されてきた事実として挙げるのは、このような状況のもとで、19世紀から20世紀への転換期におけるメンデルイズムがダーウィンの仮説に代わるパラダイムと受け取られた事実である（Bowler, 1989b, p. 110）。『『ダーウィニズム』が進化それ自体とまったく同意語となった1870年代と1880年代の絶頂期から、選択説は人気の上でずり落ちてしまい、1900年までにはその理論への反対者たちが、その理論が人気を回復することは決してないだろうと確信するほどになっていた』（Bowler, 1989a, p. 246／訳, p. 399）。1909年の秋に書かれたヴェブレンの論稿が明らかにメンデルの知見を文化史に反映させようとしたものであったことを考えれば、彼が進化論を経済学のモデルとした時代が、ダーウィンに対する評価が揺れ動いたこのような時代であったことを考慮に入れなければならない。ダーウィン解釈の諸問題については、Bowler（1990）も参照。また、ダーウィンの進化論ですら目的論的傾向を有するという理

解は、20世紀のF. ナイトの言説にも見て取ることができる。「特筆すべきであるのは、機械論的な生物学者たちでさえ目的論を用いざるをえないということ、そして科学の現状では、それが究極的であるわけではないと主張した上で独断的であるにすぎないということである。」(Knight, 1920, p. 519)

- 9) ただし、ホジソンが、一般化されたダーウィニズムがアナロジーではなく存在論であると主張する場合に、アナロジーが消極的に捉えられている根拠はそれほど明らかではない。この点に付け加えると、例えば、阪上(2001)は、アナロジーの発見的意義が、19世紀後半以降に注目されるようになったという歴史的事実に注目し、パース、マーシャルおよびヴェブレンを取り上げ、三者とも方法のレベルにおけるアナロジーの役割を認識していたと論じている。また、西部(2000, pp. 72-73)は、1980年代にマクロスキの議論を嚆矢として「経済学のレトリックとしての意味」が問い直されたことに注意を促している。西部は、その流れにある進化経済学について次のように論じている。「進化経済学が標榜する多元主義とは、諸学派の競争と共存を可能にし、経済学を豊穡化させるための一般的条件」であり、「アカデミズムにおける専門家集団の独善主義や閉鎖主義をその内部から打破する革新的担い手の存在を許容するような『開放性』をも意味している」。そして、その場合に大きな役割を果たすのが、厳密な定義や論理による形式的演繹ではなく、メタファー(隠喩)やアナロジー(類推)の力であるという(Ibid., p. 81)。ヴェブレンの進化論的経済学もこの多元主義的傾向や開放性と無縁ではなかったといえる。この点に関しては、本稿第4節におけるサミュエルズの議論も参照されたい。
- 10) 例えば、佐々野(2008)は、正統派経済学に対するヴェブレンの肯定的言説を検討することによって、彼の進化論的経済学の位置づけを検討しようとした拙稿石田(2007a)に対して批判を

行っている。拙稿の視角によれば、ヴェブレンの構想は、正統派の修正あるいは補足を意味すると誤解されかねないからである。ヴェブレンはすべての経済思想に対して否定的な立場を取った。したがって、佐々野が主張するように、そのことが既存の体制批判を念頭においていること、また、ヴェブレンの思想がその批判的・異端的側面においてこそ存在意義を有することは確かであろう。しかし、彼がなぜダーウィニズムに科学性を見出したのか、そして、彼の構想が体制を超えるものであったのかどうか、さらには、それが古典派の修正にとどまるのかどうかという問題は、それぞれ念頭におかれる必要があるとはいえ、厳密には別の問題ではないだろうか。筆者があえて正統派に対する肯定的側面を拾い上げた理由は、彼があらゆる経済思想に対して批判的な態度を取った意味を掘り下げたためであった。筆者は、彼の経済諸思想に対する批判が、彼がより適切と考えた経済学構想の提示であっただけではなく、経済学における事実と価値の関係、あるいは科学的立場と倫理的立場の関係をめぐる方法論的な問題提起でもあったと考えるからである。そして、これらの問題は古き伝統的な問題であり、言うまでもなくヴェブレンだけが取り組んだ問題ではない。したがって、彼の意図を古典派の原理的な全面否定と結論づけてしまうなら、先行する諸思想との関連で、彼がこれらの諸論点をどのように発展させ、どのような新たな解決策を示そうとしたのか、また、彼の進化論的経済学がそれらの諸思想を乗り越えようとしたら、いかなる特長を持ち合わせていたのかという問題を探究する道は閉ざされてしまう。いずれにせよ筆者は、佐々野が主張するような異端者であり体制の批判者であるヴェブレン像を否定するつもりはないし、ヴェブレンの課題が正統派の修正あるいは補足であったと主張するつもりもないということを付記しておきたい。なお、ヴェブレンの進化論的経済学の提唱が古典派のパラダイムの

放棄を意味していたのかどうかに関しては、本稿第4節のローソンの議論も参照されたい。

- 11) 最近の研究では、ホジソンの研究のように、現代の科学哲学や認知科学の知見を取り入れたヴェブレン研究が少なくない。そのため、筆者には、それらの諸議論の基礎的理解を深める必要があった。ここで、それらの文献の読書に根気強くお付き合い下さった日本大学経済学部経済科学研究所のプロジェクト「経済の変化とその対応」のメンバーおよび参加者各位に心より感謝の意を表したい。
- 12) 詳細は、ホジソンの議論を直接参照願いたいだが、十分理由律の問題については、特に Hodgson (2001b) が論文「限界効用に関する諸制約」(Veblen, 1919, pp. 231-51) を取り上げ検討を加えている。ヴェブレンは、二つの探究の方法——十分理由（ホジソンの言う志向的因果性）の探究と、作用原因（ホジソンの言う機械的因果性）の探求——がまったく関わりを持たないという認識を示しながらも、経済学を含む人間の生活を扱う諸科学が、後者の探究に一元化されてきたことについては否定的であった。生理学的アナロジーについては、特に『製作本能論』(Veblen, 1914) が検討されている。だが、本稿における以下の議論は、ホジソンの示唆を手がかりに筆者が補うものであり、必ずしも彼の論証の手順に従っているわけではない。
- 13) この点に関しては、『製作本能論』を中心に検討している新井田 (2007, pp. 9-10) の結論も参照されたい。「ヴェブレンが研究の対象とした人間の経済行動は、その目的と手段とによって分析される。それぞれを本能と制度が用意するというのが一次的な図式であり、人間本性の領域から目的が生まれ、社会的な領域から手段が与えられるという単純な理解がなされる。しかし……そのような理解は極めて不十分なものに終わる……。制度は確かに社会的な領域に属するだろうが、その存在は人間の知性と同時に始まるものであって、人間本性と切り離せない関係にあ

る。また、制度が本能の顕在を促進、抑制するという機能を強く持つことができるのは、これもまた人間本性の一部をなす競争心によることである。」

- 14) コモンズやラングロウの立場については、制度経済学と進化経済学に関わる当を得た概念史である高 (2004) 第2章、およびラザフォードとスタンフィールド (James R. Stanfield) の解釈をベースに、ヴェブレンとその後の制度派経済学の潮流を考察している塚本 (2001) を参照。
- 15) この点に関しては、ヴェブレンとコモンズの位置づけをめぐる、セックラーおよびラザフォードの考察に対する高 (2004, pp. 123-24) の批判も参照されたい。
- 16) 例えば、佐々木の一貫した主張は、ヴェブレンの経済学が「製作本能」に基づく一元論であること、そしてヴェブレンの諸著作が、すべてこの製作本能の原理によって成立しているがゆえに、この点の認識がヴェブレンの理論体系を理解する上で決定的な意義を持っているということであった (佐々木, 1998, p. 7)。
- 17) 例えば、ホジソンが創発主義的一元論者に分類した D. デヴィドソンのカント解釈を参照されたい。デヴィドソンは、自由と自然の必然性の間にはいかなる矛盾も存在しないとすのカントの言説に賛同し、「心的出来事が他の出来事との因果的相互依存関係のうちにあるということ」、そしてまた、「心的出来事には非法則性があるということ」、この二つの仮定をいかにして維持するかということの問題としている。デヴィドソンは、この問題がカントの提示した問題であり、自らの方法がカント的な解決法であると述べている (Davidson, [1980] 2001, Essay 11 / 訳, 第8章)。心的出来事と非法則性の関係 (デヴィドソン) は、人間の行為と自由の関係 (カント) につうじるからであり、その意味では、ヴェブレンの経済学構想の理解を進める上では、カントを因果二元論者に分類するホジソンの議論には再考の余地があろう。

- 18) 加えて、ヴェブレンの進化論の受容については、初期哲学研究のみならず、当時の文化人類学の影響も重要である。彼は、経済学が進化論の科学になるには、文化人類学や民俗学の成果を取り込んだ再建が不可欠であると考えていたからである。この点については、Jorgensen (1999) および拙稿石田 (2008b) を参照。
- 19) ヴェブレンの目的論概念の二重の意味に関しては、Edgell (2001, pp. 71-72) によるサーベイも参照。
- 20) 一つの論稿に詰め込むにはあまりにも複雑かつ膨大であり、それゆえに詳細な検討がなされているとは必ずしもいえないが、フォレストイは、ヴェブレンの経済学構想を理解するための興味深い思想的連関を示唆している。例えば、スペンサーに対する、W. ヒューウェル、H. L. マンセルおよび W. ハミルトンを経由したカントの影響であり、科学の役割をめぐるヴェブレンの師ポーターのダーウィン解釈である。
- 21) ラザフォードによれば、ヴェブレンは、「目的論から解放されるとともに、本質的に純粋に因果的である進化論」(Rutherford, 1998, pp. 475-76) を追究したが、それは究極的には失敗したプログラムであり、それゆえに彼の弟子であるフォクシー (Robert F. Hoxie, 1868-1916) やミッチェルらは、ヴェブレンの経済学構想を発展させるのを断念した (Ibid., pp. 464-65)。ヴェブレンと次世代制度主義の断絶を説明する優れた洞察である。だが、ラザフォードの主要関心は、ヴェブレンの経済学構想の解釈を押し広げるといふよりは、むしろその継承関係を見極めようとするものであったと受け取られるべきであろう。
- 22) このナイトの問題を今日において掘り下げている研究として Tilman (2007) がある。例えば、ティルマンは、特に本書の第6章において、ヴェブレンにおける「純粋な」美あるいは「一般的な」美の基準とはどのようなものであったか、そこから敷衍して、「ヴェブレンのいう価値が支配的な基準となるなら、その社会はどのように見えるか」という興味深い問題を立てている (Tilman, 2007, p. 146)。
- 23) サミュエルズは、このような思考習慣あるいは前提観念に関するヴェブレンの理解が、ミシェル・フーコーの構造主義に近いものであること、また、「事実問題性は純粹で独立した事実の問題なのではなく、人間の帰属の問題である」というヴェブレンの認識が、ワイトゲンシュタインの言語哲学やカール・ポパーの反証主義に通じるものであると付け加えている (Samuels, 1990, pp. 695, 702)。また、Tilman (2007, p. 245) は、クーン的なパラダイム概念が、ヴェブレンの科学史における思考習慣あるいは精神習慣の概念にとうじるものであると指摘している。
- 24) もちろん、この解釈には相対主義に典型的なパラドックスが生じよう。ヴェブレンが批判した諸思想もそれぞれ道具的な有用性を持つわけであるから、(サミュエルズ自身が言うように) 比較のためのメタシステムがない限り、ヴェブレンの批判の輪郭自体が失われる可能性がある。
- 25) ランソンは、サミュエルズの議論をヴェブレン解釈を下敷きにした相対主義的科学観の擁護と見なした。したがって、必然的に彼のサミュエルズ批判は、相対主義的科学観それ自体に対する批判という様相を呈しているように見える。ランソンは、デューイ、エアーズおよびフォスターら (おそらくヴェブレンを含む) が、悪しき二元論的伝統を論駁するという知的伝統に属していた点を強調しているが、必ずしもサミュエルズによるヴェブレンのテキスト解釈に検討を加えているわけではない。
- 26) おおむね同様の論点について、例えば、杭田の次のような指摘もある。「……科学論の見地からすると、ヴェブレンの理論は分析対象との『自己言及的』関係を理論構造へと意識的に反映させている。つまり進化経済理論は、自己と分析対象を単純に分離して理論対象の外部に視点を置き、第三者的客観として理論化を進めるようなものではない。それは分析視点そのものが対

象との関連で生み出されることを把握し、知性と対象との関係自体を『自己言及的』に捉えて理論化するような理論である。このことによって、一方では絶対的な客観基準が存在しえないという制約を理論構造へと意識的に反映させて決定論的な議論と一線を画し、他方では判断基準を持たない単なる相対主義とも距離を置き、累積的な因果関係の連鎖プロセスのなかで累積的に確認される経験に基礎をおくことによって現実性を獲得するような理論へと向かうことができたのである。」（杭田, 2005, p. 15）。

- 27) ローソンの主張どおり、エアーズらのヴェブレン解釈とともにサミュエルズらの解釈が退けられるなら、本稿第2節で取り上げたジョーンズの問題の一つ——経済学説における適者生存の問題——も解消されることに注意されたい。
- 28) Letter from Malcolm Rutherford to Warren J. Samuels (Samuels, 1990, p. 709)。
- 29) この点については、高 (2004, p. 133) の次の言及も参照されたい。「ヴェブレン自身が『モノ作り本能と産業技術の状態』(1914)を『書き終えた後で』、それが彼の唯一の重要な著作だと言ったという噂をドーフマンが広めたことが原因となって、『モノ作り本能』が、ヴェブレンのさらに深められた思想を体现するものであるかのような言説がなされている。」(ここで言われる「モノ作り本能」(instinct of workmanship)は、ラザフォードの示唆する「職人らしさ」につづるものである)。だが、高は、時とともに、このヴェブレンの概念規定が多少とも変化していった点に注意を促す。ヴェブレンは、メンデル遺伝学の影響を受けた後では、人間という種の存続のために遺伝子のなかに鑄込まれた特徴を「モノ作り本能」と名づけた。その場合に、それは、「肉体を維持するために欠かせない『無駄を避ける』本能、子孫を残すために欠かせない『親としての性向』、さらに子孫増加に不可欠な生産性向上のために欠かせない本能としての『知的好奇心』を含んでいるという包括的な理解」に至った

(Ibid., pp. 135-36)。それゆえ、高は、ヴェブレンの本能概念が「職人らしさ」とのみ結びつけられ、他の諸本能よりも上位におかれる傾向には懐疑的であり、より重層的な本能概念の理解を提案している。

- 30) 今日の進化経済学においても、進化のインプリケーションに関わる統一的な定義や共通の理解が得られていないのが現状であり、進化という観点から経済を分析しようとする場合、これらのキー概念自体の再考が求められている。この点に関しては、例えば、井上 (1999) および西部 (2000) も参照。

### 参考文献

- 石田教子 (2007a) 「ヴェブレンとダーウィニズム——人間行為論を中心に——」『経済学史学会 第71回全国大会 大会報告論集』, pp. 67-72。
- (2007b) 「ヴェブレンによるイギリス経済思想史解釈の意義——進化論的経済学の位置をめぐって——」『経済学史研究』第49巻, 第2号, pp. 18-34。
- (2008a) 「ヴェブレンとアダム・スミスの経済学——『国富論』第1編価値論を中心に——」『経済集志』第78巻, 第2号, pp. 67-91。
- (2008b) 「ヴェブレンとアダム・スミスの自然法思想——経済学の方法をめぐって——」『中央大学経済研究所年報』第39号, pp. 449-81。
- 井上義朗 (1999) 『エヴォルーションナリー・エコノミクス：批判的序説』有斐閣。
- 杭田俊之 (2005) 「ヴェブレン進化経済理論の構成と『観点』」『アルテスリベラレス』第77号, pp. 13-35。
- 阪上孝 (2000) 「進化論と人文・社会科学——アナロジーを中心に——」『ダーウィン以後の人文・社会科学』上野成利編, 京都大学人文科学研究所, pp. 1-23。
- 佐々木晃 (1995) 「ソースタイン・ヴェブレンの制度進化の理論」『紀要』第20号, pp. 71-82。
- (1998) 『ソースタイン・ヴェブレン——制

- 度主義の再評価——』ミネルヴァ書房。
- 佐々野謙治 (2003) 『ヴェブレンと制度派経済学——制度派経済学の復権を求めて——』ナカニシヤ出版。
- (2007) 「ヴェブレンの経済学とミッチェル、コモنز——ヴェブレンの継承者は誰か——」『エコノミクス』第12巻, 第1-2号, pp. 1-32.
- 高 哲男 (2004) 『現代アメリカ経済思想の起源——プラグマティズムと制度経済学——』名古屋大学出版会。
- (2006) 「T. B. ヴェブレン——経済学の脱構築と進化論——」橋本努編『20世紀の経済学の諸潮流』所収, 日本経済評論社, pp. 1-51.
- 塚本隆夫 (2001) 「進化論的経済学の現状と課題——ヴェブレン経済学の視点から——」『経科研レポート』第20号, pp. 23-44.
- 中山 大 (1974) 『ヴェブレンの思想体系』ミネルヴァ書房。
- 新井田智幸 (2007) 「ヴェブレンの制度論の構造——人間本性と制度・制度進化——」『経済学研究』第49号, pp. 1-12.
- 西部 忠 (2000) 「進化経済学の概念的・方法的基礎——メタファー・アナロジー・シミュレーション——」『経済学研究』第50巻, 第1号, pp. 69-82.
- Bowler, Peter J. (1989a) *Evolution: The History of an Idea*, revised edition, Berkeley: University of California Press. (鈴木善次ほか訳 (1987) 『進化思想の歴史』全2巻, 朝日新聞社).
- (1989b) *The Mendelian Revolution: The Emergence of Hereditarian Concepts in Modern Science and Society*, London: The Athlone Press Ltd.
- (1990) *Charles Darwin: The Man and His Influence*, Cambridge: Cambridge University Press. (横山輝彦訳 (1998) 『チャールズ・ダーウィン——生涯・学説・その影響——』朝日新聞社).
- Commons, J. R. ([1934] 1990) *Institutional Economics: Its Place in Political Economy*, 2 Vols. New Brunswick: Transaction Publishers.
- Darwin, Charles ([1859] 1993) *The Origin of Species by Means of Natural Selection or the Preservation of Favored Races in the Struggle for Life*, New York: The Modern Library. (八杉龍一訳 (1990) 『種の起源』全2巻, 岩波文庫).
- Davidson, Donald ([1980] 2001) *Essays on Actions and Events*, 2nd Edition. Oxford: Oxford University Press. (服部裕幸, 柴田正良訳 (1990) 『行為と出来事』勁草書房).
- Dorfman, Joseph ([1934] 1972) *Thorstein Veblen and His America with New Appendices*, New York: Augustus M. Kelley. (八木甫訳 (1985) 『ヴェブレン——その人と時代——』ホルト・サウンダース・ジャパン).
- Dretske, Fred (1988) *Explaining Behavior: Reasons in a World of Causes*, Massachusetts: The MIT Press. (水本正晴訳 (2005) 『行動を説明する——因果の世界における理由——』勁草書房).
- Edgell, Stephen and Rick Tilman (1989) "The Intellectual Antecedents of Thorstein Veblen: A Reappraisal," *Journal of Economic Issues*, Vol. 23, No. 4, pp. 1003-26.
- Edgell, Stephen (2001) *Veblen in Perspective: His Life and Thought*, Armonk, N. Y.: M. E. Sharpe.
- Foresti, Tiziana (2004) "Between Darwin and Kant: Veblen's Theory of Causality," *International Review of Sociology—Revue Internationale de Sociologie*, Vol. 14, No. 3, pp. 399-411.
- Hayakawa, Hiroaki (2007) "Thorstein Veblen's Theory of Leisure Class and Adam Smith's Theory of Moral Sentiments through the Eyes of Parsons' Institutionalization of Normative Values," *Journal of Policy & Culture—Sogoseisaku Kenkyu*, No. 15: 1-34.
- Hofstadter, Richard ([1944] 1992) *Social Darwinism in American Thought*, Boston: Beacon Press. (後藤昭次訳 (1973) 『アメリカの社会進化思想』研究社).
- Hodgson, Geoffrey M. (2001a) *How Economics Forgot History: The Problem of Historical Specificity in Social Science*, London and New York: Routledge.
- (2001b) "Darwin, Veblen and the Problem of Causality in Economics," *History and Philosophy of the*

- Life Science*, Vol. 23, pp. 383-423.
- (2002) “Darwinism in Economics: From Analogy to Ontology,” *Journal of Evolutionary Economics*, Vol. 12, No. 2, pp. 259-81.
- (2008) “How Veblen Generalized Darwinism,” *Journal of Economic Issues*, Vol. 42, No. 2, pp. 399-405.
- Jones, Lamar B. (1986) “The Institutionalists and *On the Origin of Species*: A Case of Mistaken Identity,” *Southern Economic Journal*, Vol. 512, pp. 1043-55.
- (1990a) “Rejoinder to Liebhafsky,” *Journal of Economic Issues*, Vol. 24, No. 1, pp. 261-62.
- (1990b) “Rejoinder to Tilman,” *Journal of Economic Issues*, Vol. 24, No. 1, pp. 268-69.
- Jorgensen, Elizabeth and Henry (1999) *Thorstein Veblen: Victorian Firebrand*, New York: M. E. Sharpe.
- Knight, F. H. (1920) “Review of Veblen’s *The Place of Science in Modern Civilization*,” *The Journal of Political Economy*, Vol. 28, No. 6, pp. 518-20. *JSTOR* 2008/08/30 <<http://www.jstor.org/stable/1821067>>.
- Lawson, Tony (2002) “Should Economics Be an Evolutionary Science?: Veblen’s Concern and Philosophical Legacy,” *Journal of Economic Issues*, Vol. 36, No. 2, pp. 279-92.
- Liebhafsky, H. H. (1988) “An Institutional Evaluation of the Recent Apparently, But only Apparently, Fatal Attack on Institutionalism,” *Journal of Economic Issues*, Vol. 22, No. 3, pp. 837-51.
- Porter, Noah (1888) “Darwin’s Theory of Knowledge vs. His Theory of Evolution,” *New Englander and Yale Review*, Vol. 48, Iss. 216, pp. 205-09. *Making of America* 2008/06/12 <<http://cdl.library.cornell.edu/cgi-bin/moa/moa-cgi?notisid=ABQ0722-0048-38>>.
- Ranson, Baldwin (1991) “Warren Samuels: The Absolute Relativist,” *Journal of Economic Issues*, Vol. 25, No. 3, pp. 842-46.
- Rutherford, M. (1998) “Veblen’s Evolutionary Programme: A Promise Unfulfilled,” *Cambridge Journal of Economics*, Vol. 22, No. 4, pp. 463-77.
- Samuels, Warren J. (1990) “The Self-referentiability of Thorstein Veblen’s Theory of the Preconceptions of Economic Science,” *Journal of Economic Issues*, Vol. 24, No. 3, pp. 695-718.
- (1991) “Veblen and Self-Referentiability: Reply to Baldwin Ranson,” *Journal of Economic Issues*, Vol. 25, No. 3, pp. 847-50.
- Tilman, Rick (1990) “Darwinism and Institutional Economics: Recent Criticism of Veblen and Ayres,” *Journal of Economic Issues*, Vol. 24, No. 1, pp. 263-67.
- (2007) *Thorstein Veblen and the Enrichment of Evolutionary Naturalism*, Columbia: University of Missouri Press.
- Veblen, Thorstein (1884) “Kant’s Critique of Judgment,” *The Journal of Speculative Philosophy*, No.18. Reprinted in Veblen (1994, X), pp. 175-93.
- (1891) “Some Neglected Points in the Theory of Socialism,” *Annals of American Academy of Political and Social Science*, No. 2. Reprinted in Veblen (1994, VIII), pp. 387-408.
- (1898) “Why is Economics Not an Evolutionary Science,” *The Quarterly Journal of Economics*, Vol. 12, No. 4. Reprinted in Veblen (1994, VIII), pp. 56-81.
- (1899a) “The Preconceptions of Economic Science, Part I,” *The Quarterly Journal of Economics*, Vol. 13, No. 2. Reprinted in Veblen (1994, VIII), pp. 82-113.
- (1899b) *The Theory of the Leisure Class: An Economic Study of Institutions* (originally published as *The Theory of the Leisure Class: An Economic Study in the Evolution of Institutions* in 1899 by the Macmillan Company). Reprinted in Veblen (1994, I). (小原敬士訳 (1961) 『有閑階級の理論』岩波書店; 高哲男訳 (1998) 『有閑階級の理論——制度の進化に関する経済学的研究——』筑摩書房).
- (1899c) “The Preconceptions of Economic Science, Part II,” *The Quarterly Journal of Economics*, Vol. 13, No. 4. Reprinted in Veblen (1994, VIII), pp. 114-47.
- (1900) “The Preconceptions of Economic Science, Part III,” *The Quarterly Journal of Economics*, Vol. 14, No. 2. Reprinted in Veblen (1994, VIII), pp.

148-79.

———— (1904) *The Theory of Business Enterprise*. Reprinted in Veblen (1994, II). (小原敬士訳 (1965) 『営利企業の理論』 勁草書房).

———— (1908) "The Evolution of the Scientific Point of View," *The University of California Chronicle*, Vol. 10, No. 4. Reprinted in Veblen (1994, VIII), pp. 32-55.

———— (1914) *The Instinct of Workmanship and the State of the Industrial Arts*. Reprinted in Veblen

(1994, III). (松尾博訳 (1997) 『ヴェブレン 経済的文明論——職人技本能と産業技術の発展——』 ミネルヴァ書房).

———— (1919) *The Place of Science in Modern Civilization and Other Essays*. Reprinted in Veblen (1994, VIII).

———— (1994) *The Collected Works of Thorstein Veblen*, 10 Vols, London: Routledge/ Thoemmes Press.